

課題遂行時の気分にあぼす 内一外帰属スタイルの効果

筑波大学大学院 (博) 心理学研究科 丹羽 洋子

筑波大学心理学系 高野 清純

Effects of internal-external attributional style on self-rated mood and subsequent task performance

Yoko Niwa and Seijun Takano (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of this study was to examine the effects of the internal-external attributional style on subsequent task performance and on self-ratings of mood following different amounts of success or failure. 117 fifth-grade students were divided according to their attributional style into "internal" and "external" and "nondefined" groups and were exposed to either a little or no unsolvable problems (success conditions), or either a little or half solvable problems (failure conditions). After this, all subjects completed a mood check-list. The results revealed that internal groups reported greater self-esteem (pride) under success conditions than did external or non-defined groups. In the failure conditions, nondefined groups tended to exhibit stronger feelings of anger, depression and disgust compared with external or internal groups. Implications for a theoretical model of the relation between attribution process and affects (or moods) were discussed.

Key words : school age children, attributional style, internal-external, affects, moods.

現在のところ、原因の次元と情緒反応の関連についての研究はまだかなり少なく、大きく分けて2つの立場から研究されているにすぎない。すなわち、原因帰属における感情の役割についてはじめて注目したWeiner (1978) の帰属理論にもとづいた情緒研究と、もう一つはSeligman (1979) のlearned helplessness理論における抑鬱感情 (depression) の研究である。

まず最初に帰属理論からの研究を見ていくと、Weiner (1978), Weiner, Russell & Lerman (1979) は「達成の分脈でのさまざまな認知 (原因帰属) は情緒反応に影響する」との仮説をたて、それを検討するためいくつかの実験を行っている。例えば、成功・失敗を含む様々な達成についての経験を思いださせ、その時の感情を3つ描写させることにより、原因の次元と情緒反応について次のような結果を分

析している。成功時には、内的帰属をすることによって、1) pride 2) competence 3) confidence 4) satisfaction (Weiner (1978), Smith & Kluegel (1982) では除かれている) の感情が区別され、失敗時の内的帰属によって、1) guilt 2) resignation の感情が生じると分類されている。この結果にもとづいて、Weinerの帰属理論の枠組みでその後いくつかの研究がなされてきた。Zaleski (1988) は、大学生が大学での学科を達成していく上での成功・失敗の帰属とその情緒反応について調べている。そこでは、成功時には内的帰属とpride、外的帰属と感謝・驚きが相関し、失敗時には内的帰属とguilt・恥、外的帰属と怒り・frustrationが相関していることが見いだされた。

しかし、Weiner自身の研究ははじめその後の研究結果では、必ずしもWeiner (1979) で分類されたよう

な明確な原因の次元と情緒反応との関係は見いだされていない。これは、Weiner (1979) では実際の達成場面での情緒反応ではなく仮想された場面への情緒反応を強制的に3つ描かせたため、実際は感じていなくても「おそらくこの場面ではこの情緒反応であろう」というように被験者によって予想された反応が見いだされ、従って多くの感情が明確に分類されたとも考えられる。したがって、最も最近のWeiner (1986) の著書ではこれらは多少修正され、「内的-外的帰属と関連した感情としてはself-esteem (pride) である」とされている。そして成功時の内的帰属により、より高いself-esteem (pride) を生じ、反対に失敗時の内的帰属はself-esteemを低めると述べられている。当初の理論と比較して修正された点としては、まず第一に成功時の情緒反応を、上に示したような個々の感情からself-esteem (pride) とした点であろう。上記されたいずれの感情もesteemに關した感情であるため、これまでの過去の研究をみても実際の達成場面では相互に区別されにくいであろうと思われるため、まとめてself-esteemに關した感情としたのは妥当であろうと思われる。第二点目としては、成功時の裏返しとして、「失敗時には内的帰属によりself-esteemが低くなる」と述べられているのみで、失敗時の情緒反応についての記述が削除されていることである。失敗時の情緒反応については「恥」の感情以外はこれまでほとんど研究がなされておらず、それらの小数の研究結果をみてもあまり明確な一致した結果が見いだされてこなかったため、このような現状に至ったものと考えられる。

ところが、丹羽 (1989a) が、原因の次元と感情の關係について検討した研究結果からも、成功時と失敗時の感情ではそのpatternが異なっており別々の認知過程を経るものと考察されている。Weiner (1986) のいうように「成功時には内的帰属によりself-esteemが高まり、失敗時には低くなる」とは直線的に言えないのではないかと予測される。したがって本研究では、内的-外的帰属のちがいによって成功・失敗時に生じる情緒反応が、self-esteemの高低のみで説明されるものであるのかそれとも成功・失敗時それぞれによってかなり複雑な感情のpatternを示すものであるのかを明らかにすることを第一の目的とする。

次に2つめのlearned helplessness理論からの研究を見てみると、learned helplessness (以下LHと略す) 状態はemotionalityの増加と関連している (Seligman 1975) との仮説にもとづいて、課題達成の失敗時 (特にLH状態) のときのdepression (抑鬱)

感情について研究がなされている。その結果、Peterson & Seligman (1984) の研究によれば、sadness, anxiety, hostilityを含んだ情緒的deficits, 攻撃性の低下, self-esteemの低下などの兆候がdepressionの症候群であると述べられている。また同様に、Gatchel, Paulus & Maples (1975) の研究においても、人間のLH状態と関連した気分の測定を行っており、depression, anxiety, hostilityなどのmood statesはLHの理解に重要な感情であることが明らかにされている。

SeligmanらのLH理論の改訂にあたっては、原因の次元の概念が導入されており、これによってdepressionと原因の帰属との関連性がより重視されるようになった。Abramson (1978) は、depressionの強い人は、失敗時の原因を内的・安定性・全体要因に帰属する「負の抑鬱的帰属スタイル」と、成功時の原因を外的・不安定性・特殊要因に帰する「正の抑鬱帰属スタイル」があることを見いだした。Mikulincer (1986) やその他の研究においては「LH状態の時、内的帰属をする方が外的帰属より、より強いdepressionを感じself-esteemが低められる」ことが示されているが、他方ではLH状態の時、内的・外的帰属間で差がないという結果も得られている (Klein, Fencil-Morse & Seligman 1976)。

ところでわが国においては、小島 (1983) が大学生を対象に実験を試みているが、失敗時にはdepression傾向の者が必ずしも内的帰属しておらず、失敗時の「負の抑鬱帰属スタイル」は見いだされなかった。同様に、depression・helplessnessと帰属の關係について小学5・6年生について検討した桜井 (1986) においても、失敗時にはdepression・helplessness傾向の強い子は外的帰属する傾向が見られており、SeligmanやAbramsonらの結果とむしろ逆の傾向がみられているようである。以上の事から、果して失敗時に内的帰属する者がdepressionの感情を強く持つのかどうかを検討すること、さらにはLH理論の枠をこえてdepression以外の負の感情についても検討を加えることを第二の目的とする。

また、Connell (1985) は、内的帰属・外的帰属に加えて「できごとの原因がわからない」というUnknown帰属を導入し、Unknown帰属とcompetence・動機・学業達成のあいだに負の相関のあることを見いだしている。同様にUnknownの次元を加えて、領域別三次元統制感尺度を作成している桜井 (1986) においても、Unknown帰属とhopelessness・depressionが相関することが示されている。したがって本研究においては、失敗時の情緒反応を強く喚起するのは、内的帰属であるのか外的帰属である

のか、もしくはUnknown帰属であるのかについて検討することを第3の目的とする。

最後にもう一つ、LH理論からの示唆として、達成における帰属を取り扱う場合考慮しなければならない変数があるように思われる。Mikulincer (1988) はその研究の中で「LH研究者は失敗時の内的帰属が行動に及ぼす影響について研究しているが、得られた結果はまちまちである。これらの不一致は方法論上の問題に帰すると考えられ、用いた課題の困難さ（もしくは失敗の程度）と内一外的帰属が混乱している」と指摘している。このように失敗の程度によって、後の達成が異なることはこれまでの研究でも検証されている。Wortman & Brehm (1975) の研究では、失敗の程度を操作したところ失敗が小さい時には被験者が結果をコントロールできると期待したため、遂行が高まった。またPittman & Pittman (1979) の研究では興味深い結果が提示されている。high helplessness条件では、内的帰属の方が外的帰属よりも達成が阻害され、より多くのdepressionを感じていた。一方low helplessness条件では、内的帰属のほうが外的帰属よりも達成が優れており、最も強い敵意を感じていた。したがって本研究では、失敗の程度（同時に成功の程度）を変数として加え、失敗（成功）の程度のちがいで、それぞれの帰属間では情緒反応に違いがみられるかどうかについて検討することを第4の目的とする。

仮説としては以下のようなものがあげられよう。

- ①成功時には内的帰属とself-esteem (pride) との正の関係は認められるであろうが、失敗時には必ずしも内的帰属とself-esteemとの負の関係は認められないであろう。
- ②失敗時に内的帰属をする者が、depressionが強くなるとはいえないであろう。
- ③情緒反応に強く影響するのは、成功時には内的帰属であろうが、失敗時には外的帰属もしくはUnknown帰属であろう。
- ④成功の程度が大きい程情緒反応は高まり、一方達成は低くなるであろう。失敗の程度が大きい程情緒反応は高まり、他方達成は低まるであろう。

方 法

被験者 神奈川県内の公立小学校5年生 計117名 (男子66名 女子51名)

実験計画 3帰属スタイル (内的・外的・Unknown) × 2成功の程度 (大・小)

3帰属スタイル (内的・外的・Unknown) × 2失敗の程度 (大・小) いずれもすべて被験者間要因

手 続 き ①実験に先だってその1週間前に、個人の帰属スタイルを測定するために、原因の次元測定質問紙 (丹羽 1989a) がクラス単位で担任教師によって実施された。尚、回答形式に関してはこれまでのSD法から、内的帰属・外的帰属・Unknownの3選択肢からの強制選択法へと若干修正された。

②以上の測定結果にもとずいて、それぞれの帰属スタイルへの得点の高いものを選び出して、内的帰属群 (N=23)・外的帰属群 (N=27)・Unknown帰属群 (N=29) の3群が設定された。さらにこれらの3群それぞれは、成功経験をうける条件と失敗経験を受ける条件の2つにランダムにわけられた。したがって、以下の分析で用いられた人数は、合計79名であり内訳は下のTable 1に示したとおりである。

Table 1 実験条件群ごとの被験者の人数

実験条件群	成功経験	失敗経験
内的帰属群	12	11
外的帰属群	13	14
Unknown群	14	15
	合 計	79名

③トレーニング・セッション

実際の実験に際しては、Table 1に示された3群をさらにまた、成功（失敗）経験の大群と小群の2群にランダムに分割された。

トレーニングに用いられた課題は、まず最初に4枚からなる数字の課題が実施された。続いて、同様に4枚からなる文字の課題が実施された。いずれも1枚2～3問の問題からなっていた。

成功（失敗）の程度の大・小は、これらの課題の難易度によってあらかじめ次のように操作された。

◎成功の大群—数字課題・文字課題いずれも4枚とも、5年生であればだれでも解ける程度の問題

◎成功の小群—数字課題・文字課題いずれも4枚中、2問だけ5年生にはかなり困難な問題。その他は5年生であればだれでも解ける程度の問題

◎失敗の小群—数字課題・文字課題いずれも4枚中、2枚は5年生にはかなり困難な問題。その他は5年生であればだれでも解ける程度の問題

◎失敗の大群—数字課題・文字課題いずれも4枚中、2問だけ5年生であればだれでも解ける程度の問題。その他は5年生にはかなり困難な問題。

④トレーニング中の情緒測定

1) トレーニング・セッションでの「課題解決時

に次のような感情をどれくらい感じたか」を“とてもそう思う(4点)～全然そう思わない(1点)”まで4段階で評定された。

◎成功の大群と小群に提示された感情

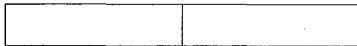
- ・うれしい
- ・とくいな気持ち
- ・みんなにみせたい気持ち
- ・楽しい
- ・おもしろい
- ・えらいんだなあという気持ち

◎失敗の大群と小群に提示された感情

- ・ひどくいやな感じ(嫌悪)
- ・がっかり
- ・とても不愉快で落ち込んだ感じ(抑鬱)
- ・くそーという感じ
- ・かっこ悪いという気持ち(恥)
- ・しょんぼり
- ・だめな人間だという気持ち

2)「全体として、問題をしている時の気分はどうだったか」について“とてもいい気分～とてもいやな気分”まで、下のような図の中に、まん中から右または左に、気分に応じた量だけ色を塗らせた。得点化に際しては、塗られた長さに応じて1点～10点まで10件法で評定された。

とてもいやな気分 ← ————— → とてもいい気分



⑤テスト・セッション

1) 達成課題

知能検査に似た課題関与型の問題を2枚提示。1枚に4問ずつ、合計8問からなる。5年生なら解ける中程度の問題。正解・不正解にかかわりなく、3分以内に取り組んだ問題の数が達成得点とされた。

2) 興味の測定

「今日やったような問題はまたやってみたいですか、もうやりたくないですか。」について“全然やりたくない～とてもやりたい”まで6段階評定された。

結果と考察

①因子分析

仮説1すなわち内的帰属とself-esteemとの関連が認められるか否かについて検討するため、まずトレーニング中の情緒測定について分析がなされた。それぞれの感情の評定値について、成功群によって評定されたpositive感情・失敗群によって評定されたnegative感情別々に因子分析にかけられた。その

結果、成功群のpositive感情については2因子を抽出し、バリマックス回転をおこなった。回転後の因子分析結果はTable 2に示されたとおりである。

Table 2 positive感情についての因子分析結果

感情項目	I	II
楽しい	.91	
うれしい	.66	
おもしろい	.39	
みんなにみせたい気持ち		.70
とくいな気持ち		.62
えらいんだなあという気持ち		.37
因子負荷量の2乗和 (寄与率 %)	1.93 (32.16)	1.13 (18.83)

(注) 因子負荷量は.35以上を記載した

第1因子は「一般的正の感情」、第2因子は「有能感」に関する感情因子と命名できよう。したがってこの場合、第2因子がself-esteem (pride) に関する感情にあたると考えられる。よって以下の分析においては、個人の「一般的正の感情」得点と「有能感」得点を算出し、個々の感情についてと同時にこれらについても分析を加えることとする。

一方、失敗時のnegative感情については明確な因子構造が見いだされなかった。用いられた感情語の中で、self-esteemに関する感情とその他の感情を分離するのは不可能だということである。故に、negative感情については、個々の感情について分析して行くこととする。

②基礎的統計と分散分析

成功条件・失敗条件別に、各帰属スタイル群ごとの情緒反応および達成・興味得点の平均値について示したのが、次頁のTable 3とTable 4である。

つぎに、情緒反応におよぼす帰属スタイルの効果を見るために、3帰属スタイル(内的・外的・Unknown)×2成功(失敗)の程度(大・小)の分散分析が行われた。

成功条件

Table 3には帰属スタイルの主効果と成功の量の主効果の見られたもののF値とその有意性が示されている。交互作用はいずれも有意ではなかった。これをみれば明らかのように、前の因子分析で有能感に関する感情と特定された3つの感情についてはすべて帰属スタイルの主効果がみられる。またその傾向も一貫しており内的帰属によってesteemが高まり外的帰属ほどesteemが低まることがわかる。したがってこれらの感情から構成された有能感(self-

Table 3 各帰属スタイル群ごとの平均値
と帰属スタイル×成功の量の分散分析結果〈成功条件〉

情緒反応・達成	内的帰属	外的帰属	Unknown	帰属スタイル の主効果 (F値)	成功の量の 主効果 (F値)
うれしい	2.75	2.46	2.50	……	……
とくいな気持ち	2.92	2.15	2.57	3.04*	4.28*
みんなに見せたい気持ち	3.00	2.15	2.57	2.49+	……
楽しい	2.67	2.46	2.64	……	……
おもしろい	3.08	2.92	2.42	……	……
えらいんだなあという気持ち	2.17	1.23	1.50	2.82+	……
一般的正の感情	2.83	2.61	2.52	……	……
有能感 (self-esteem)	2.70	1.85	2.21	5.25**	……
全体的気分	7.33	6.85	6.00	……	……
課題の達成	5.00	4.39	4.57	……	5.38*
興味	5.42	4.23	4.71	2.64+	……

+ $p < .1$ * $p < .05$ ** $p < .01$

Table 4 各帰属スタイル群ごとの平均値
と帰属スタイル×失敗の量の分散分析結果〈失敗条件〉

情緒反応・達成	内的帰属	外的帰属	Unknown	失敗の量 主効果 (F値)	交互作用 (F値)
嫌悪	1.73	2.07	2.53	……	2.23+
がっかり	1.27	2.07	1.80	……	……
抑うつ	1.18	1.71	1.73	……	3.30*
くそー	1.90	2.14	1.93	……	1.70+
恥ずかしい	1.18	1.21	1.53	……	……
しょんぼり	1.27	1.36	1.40	……	……
だめな人間だという気持ち	1.36	1.36	1.40	3.74*	……
全体的気分	4.18	4.50	4.13	……	……
課題の達成	4.27	4.14	4.26	6.99*	……
興味	3.73	3.71	3.20	……	……

+ $p < .1$ * $p < .05$

esteem) は同様に 1%水準で帰属スタイルの主効果の
見られる事がわかる ($F(33, 2) = 5.25$, $p < .01$).
しかしその他の感情については帰属の主効果は
見いだされなかった。これは、内的帰属の次元と
self-esteemとの結び付きを主張した Weiner 理論
を裏付けるものである。

また、「とくいな気持ち」については、成功の量の

主効果も見いだされており ($F(33, 1) = 4.28$,
 $p < .05$), 成功が大群 ($M = 2.88$) のほうが成功小群
($M = 2.26$) より得意な感情を多く感じる事が見
いだされた。全体的気分については、いずれの主
効果も見いだされなかった。

課題の達成については帰属の影響はみいだされず、
これは「達成行動にあぼす認知的プロセスの中で、

帰属が直接その後の達成に影響する程度は少ない」との見解を得た丹羽(1986)の結果と一致するものである。課題の達成については、成功の大小の主効果がみられ($F(33, 1) = 5.38$ $p < .05$)、すべての問題を解けた成功大群($M = 4.15$)より少し解けない問題も含まれていた成功小群($M = 5.16$)のほうが後の課題をより多く遂行しており、動機づけが高まっているものと考えられる。興味については、帰属スタイルの主効果が見られ有能感と同様に内的帰属する者の方がよりおもしろいと感じているものと思われる。

失敗条件

Table 4の中には、失敗の量の主効果と帰属スタイル×失敗量の交互作用のみられたもののF値とその有意性を示した。「嫌悪」「抑鬱」「くそー(怒り)」について交互作用がみられたため、次のFig. 1からFig. 3にその関係を図で示した。これからあきらかなようにいずれの感情もほぼ同じパターンを示し、Unknown群は失敗の量が少ない時にはあまり感じないのに、失敗の程度が大になるとこれらの感情を有意に多く感じるが見いだされた。

また「だめな人間だという気持ち」については、失敗の程度の主効果が表れており、失敗大群($M = 1.60$)のほうが失敗小群($M = 1.15$)より、有意に多くの無能感を感じていることがわかった。その他の感情及び全体的気分については、主効果も交互作用も見いだされなかった。

課題の達成についても帰属の主効果や交互作用はみられず、成功条件の場合の効果と一致する。成功条件の時と同様、失敗の程度の主効果($F(34, 1) = 7.00$, $p < .01$)のみが見られた。失敗小群($M = 4.82$)は失敗大群($M = 3.47$)よりも有意に多くの問題を達成しており、動機づけがより高いと予想される。興味については、課題の達成同様いずれの主効果も交互作用も見られなかった。

以上からわかる通り、失敗条件については帰属スタイルの主効果は1つも見いだされなかった。日本において負の抑うつスタイルが見いだされてこなかった事と何らか通じるものがあるように思われる。

討 論

本研究においては、原因の次元と気分の関連について検討するために、原因の次元のうち統制の位置(内的-外的)を取り上げ、さまざまな帰属スタイル(内的・外的・Unknown)を持つものが、異なる程度(大・小)の遂行(成功・失敗)を経験した時にいかなる情緒反応(及び達成)を生じるのかが明

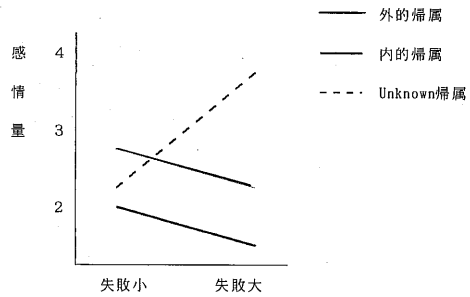


Fig. 1 「憎悪」感情について

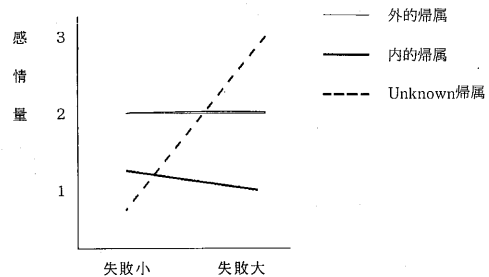


Fig. 2 「抑鬱」感情について

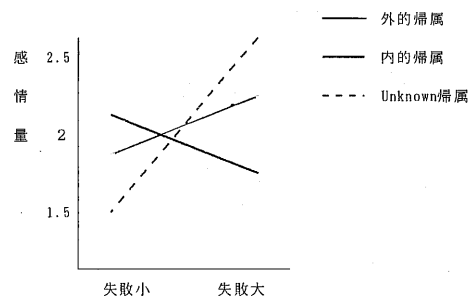


Fig. 3 「くそー(怒り)」感情について

らかにされた。

その結果まず、仮説1は実証された。成功時には、その原因が内的帰属されることによって、self-esteemに関する感情がより喚起される。それに反して、失敗時にはesteemの感情がいずれの帰属スタイルとも関連していなかった。これは、原因帰属と感情反応についての丹羽(1989a)の研究の中の、実際の達成場面で得られた研究IIIの結果と一致する。このような結果を見れば、最近のWeiner(1986)の研究では失敗時の感情について明言をさけている感があるのになぜか。「内-外帰属はself-esteem(pride)とむすびつく」ことは本研究においては成功時には実証されたが、失敗時にはWeinerが消極的に述べているような「失敗の内的帰属によってesteemが低まる」ことは見いだされなかった。

Weinerがかつて(1979)には提示し、その後いくつかの研究がなされたが結果の一致を見ていない「恥」や「incompetence」の感情については、単に内的一外的など帰属の次元のみによって影響されているものではないと推測される。丹羽(1989a)においても、positive感情とnegative感情が1次元上の両極に位置するのではなく、異なった認知過程を経て喚起されるものであることが示唆されたが、やはり失敗時の情緒反応については成功時とは切り放して考える必要があると思われる。今後他の原因の次元—例えばstability, controllability, globalityなどを同時に用いることにより、失敗の認知の仕方とself-esteemに関する感情及びその他のさまざまなnegative感情との結び付きについてさらに検討が望まれる。

仮説2についてみると、抑うつ感情を強く持つものは、失敗の量が多いときのunknown群のみであった。他の感情同様、失敗条件で内的帰属スタイルの者がnegative感情を多く感じることは一貫して見いだせず、仮説は実証された。

さらに仮説2に関連して仮説3については、成功時、内的帰属が強く影響しているのはesteemに関する感情だけであった。また失敗時には内的・外的帰属間で差はみられず、Unknown帰属のみが「抑鬱」「嫌悪」「怒り」などの感情に影響していた。このことから、わが国におけるこれまでの結果と一致して、LH理論で主張されているような失敗時の内的帰属がhelplessnessや抑鬱とは結び付かないことが示された。むしろTable 4をみてもわかるとおり、失敗時に内的帰属をするほうが、negative感情が一貫して喚起されにくくなっている。一方Unknown帰属すると、失敗の程度が大きくなるにつれ、negative感情がより喚起されるという興味深い結果が見いだされた。これはUnknown帰属と抑鬱が相関するというConnell(1986)の結果からいくらかは予測し得ないこともないが、やはりUnknown帰属は失敗時の情緒反応を強く喚起するスタイルであると考えられ、今後注目すべき重要な概念であるように思われる。

最後に仮説4については、成功の程度が大きいほど情緒反応は高まるであろう、との仮説は「得意な気持ち」のみでしかみられず、これだけでは考察することができない。また失敗時についても、程度が大きい程情緒反応の高まるのはUnknown帰属のみであった。しかし達成については、成功条件の時は、課題が完全にできるより小さく失敗したほうが達成が高まり、失敗条件の時は、大きい失敗より小さい失敗のほうがより達成が高まる。すなわちいずれも、小さい失敗が動機づけに重要であることがわかる。

「小さい失敗は、被験者が結果をコントロールできると期待するため、その結果遂行を高める」としたWortman & Brehm(1975)の研究や、失敗を操作して小さい失敗の時の動機づけが高まり、大きい失敗だとhelplessnessになることを見いだしたPittman & Pittman(1979)の研究と一致して興味深い。

課題遂行時の全体的気分(mood)については、帰属スタイルの影響は見いだせなかった。かつては感情を快と不快の1次元上で考えていたが、最近感情を因子分析した結果positive感情とnegative感情の2因子が見いだされ(Zevon & Tellegen 1982)、学校生活における感情を因子分析した丹羽(1989b)の研究においてもpositive感情とnegative感情は独立に変動するものであることが示唆されている。このことから考えると、帰属スタイルはpositiveやnegativeの個々の感情を規定するが、快・不快のような漠然とした全体的気分には影響があまりないことが推測されよう。今後達成時の気分について研究する場合、全体的気分の構成要素である個々のpositive・negative感情について注目していくことが適切であることが示唆された。

また、本研究においては、「うれしい・たのしい・おもしろい」や「がっかり・しょんぼり」などの感情は、いずれの帰属スタイルの影響も受けていなかった。これらはWeiner(1977)において、帰属とかわりなく成功・失敗の結果によって喚起される「結果依存の感情」とされたものであり、その感情と一致した結果が得られている。一方本研究で有能感(esteemに関する感情)とされたものは、Weiner(1977)で「帰属依存の感情」に一致する。とするならば、成功時のself-esteemに関する感情は内的一外的の帰属スタイルの関数であり、内一外が成功への情緒反応の強さを規定しているといえるであろう。また、失敗時の感情についても本研究の抑鬱や怒りの感情は失敗の増加に伴って生じ、その感情反応の強さは内的一外的のスタイルに従って変化すると考えられる。以上のことから、内的一外的の帰属スタイルそれ自身は、どのような感情が起こるか(Ex. 一般的正の感情・無能感・驚きの感情など)という喚起される感情の質とは関係がないが、内一外の次元の認知によって生じる感情の強さはそれぞれのスタイルによって規定されるのではないかということが示唆された。

しかし我々は実際には、本研究で取り扱った内一外の次元のみで外界や出来事を認知しているわけではなく、その他のstability・controllability・globalityはじめさまざまな認知的次元を同時に即

時的に判断しているものと考えられる。したがってそれによって喚起される感情の質が異なってくると推測される(Mandler 1984)。これまでの研究でなされてきたようにただ一つの認知的次元のみをとりあげるのではなく、これらの認知的次元を同時にとりあげてその後どのような感情が喚起されるかその質について検討していく事が今後の課題であると思われる。

引用文献

- Abramson, L.Y., Seligman, M.E.P., & Teasdale, J. 1978 Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*. 87, 49-74.
- Connell, J.P. 1985 A new multidimensional measure of children's perceptions of control. *Child Development*, 56, 1018-1041.
- Gatchel, R.J., Paulus, P.R., & Maples, C.W. 1975 Learned helplessness and self-reported affect. *Journal of Abnormal Psychology*. 84, 732-734.
- Klein, D.C., Fencil-Morse, E., & Seligman, M.E.P. 1976 Learned helplessness, depression, and the attribution of failure. *Journal of Personality and Social Psychology*. 33, 508-516.
- 小島理恵 1983 女子大生における原因帰属スタイルと抑鬱水準との関係—ASQ日本版による検討 日本心理学会第47回大会発表論文集 425.
- Mandler, G. 1984 *Mind and body: psychology of emotion and stress*. New York: Wiley.
- Mikulincer, M. 1986 Attributional processes in the learned helplessness paradigm: Behavioral effects of global attributions. *Journal of Personality and Social Psychology*. 51, 1248-1256.
- Mikulincer, M. 1988 Reactance and helplessness following exposure to unsolvable problems: The effects of attributional style. *Journal of Personality and Social Psychology*. 54, 679-686.
- 丹羽洋子 1989a 児童の達成における原因帰属—感情反応について 教育心理学研究 37, 11-19.
- 丹羽洋子 1989b 学校生活における気分の変動—positive affectとnegative affect— 日本心理学会第53回大会発表論文集 1989
- 丹羽洋子 1986 児童の達成行動に及ぼす原因帰属・能力認知・期待の影響について 筑波大学修士論文
- Peterson, C., & Seligman, M.E.P. 1984 Causal explanations as a risk factor for depression: Theory and evidence. *Psychological Review*. 91, 347-374.
- Pittman, N.L. & Pittman N.L. 1979 Effects of amount of helplessness training and internalexternal locus of control on mood and performance. *Journal of Personality and Social Psychology*. 37, 39-47.
- 桜井茂男 1986a 抑うつおよび絶望感 (hopelessness) に及ぼす原因帰属の影響 未発表論文
- 桜井茂男 1986b 領域別三次元統制感尺度の検討 教育心理学研究 34, 267-273.
- Seligman, M.E.P. 1975 Helplessness: On depression, development, and death. San Francisco: Freeman.
- Seligman, M.E.P., Abramson, L.Y. & Semmel, A. 1979 Depressive attributional style. *Journal of Abnormal Psychology*. 88, 242-247.
- Smith, E.R., & Kluegel, J.R. 1982 Cognitive and social bases of emotinal experience: Outcome, attribution, and affect. *Journal of Personality and Social Psychology*. 43, 1129-1141.
- Weiner, B., Russell, D. & Lerman, D. 1978 Affective consequences of causal ascriptions. In J. H. Harvey, W.J. Ickes, & R.F. Kidd (Eds.), *New directions in attribution research* (Vol. 2, pp. 59-90). Hilldale, NJ: Erlbaum.
- Weiner, B., Russell, D., & Lerman, D. 1979 The cognition-emotion process in achievement-related contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*. 37, 1211-1220.
- Weiner, B. 1986 *An attributional theory of motivation and emotion*. Springer-Verlag New York Inc.
- Wortman, C.B., & Brehm, J.W. 1975 Responses to uncontrollable outcomes: An integration of reactance theory and the learned helplessness model. In L. Berkowitz (Ed.), *Advances in experimental social psychology* (Vol. 8, pp. 278-336). New York: Academic Press.
- Zaleski, Z. 1988 Attributions and emotions related to future goal attainment. *Journal of Educational Psychology*. 80, 563-568.
- Zavon, M.A. & Tellegen, A. 1982 The structure of mood change: An idiographic / nomothetic analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*. 43, 111-122.